

はじめに

埼玉医科大学衛生学教室

梨 本 一 郎

潜水や圧気潜函などの作業，あるいは高気圧酸素治療（OHP）にたずさわる人々が遭遇する高気圧環境は，生体に種々な影響を与え，甚だしい場合には健康をそこなうばかりでなく，疾病をもひき起こす。

なかでも潜水病（別名，潜函病，減圧症）は，患者に大きな苦痛を与えるばかりでなく，再圧という特殊な療法を要するため，高気圧環境医学や潜水医学ではとくに重視され，多くの人々の研究の対象となってきた。

ところでわが国では1961年に労働省によって高気圧障害防止規則が施行され，高気圧作業に対し，潜水病をはじめとする高気圧障害の予防対策が，労働衛生行政の面から推進されてきた。

それにも拘らず，依然として数パーセントから数十パーセントにも達する減圧症や¹⁾，実に半数をこえる骨傷害など減圧障害の発生を示唆する報告が相ついでいる。²⁾さらに医師不在の再圧治療実施と，それによる病状の悪化や再燃など，医療体勢の不備によると思われるケースも枚挙にいとまがない。

また最近では，一連の素潜りをした海女で，血行中に減圧性の気泡が検知され，潜水病の潜在的危険が指摘されている。³⁾

しかも潜水器具を使用する職業潜水夫の数は約7,000，素潜りの海女などを加えれば実に数万名にもものぼるといわれる。一方，圧気潜函やシールドなどの高気圧作業者は約3,000名と推定され，いずれも世界中どの国よりも多い。

こうした事態は，潜水病を単に学術的興味の対象としてだけではなく，社会的な問題としてうけとめ，その解決等を早急にたてるべきことを物語っている。

そこで，まず潜水病の病態生理，予防，予知，治療，Dysbaric Osteonecrosis（圧不良性骨壊死）の項につき，それぞれ専門の立場から，概要と問題点を紹介していただき，引続き，これらをもとに基礎，臨床さらに社会医学の面を包含した総合討議を行なう。それによって潜水病の病態をより鮮明にするとともに，問題解決への手がかりを見出したいと願う次第である。

参考文献

- 1) 梨本一郎他：高気圧作業に伴う減圧症の発生について 日本高気圧環境医学会雑誌 10巻 39-41頁，1975

- 2) Ohta, Y. et al: Bone lesions in divers. J. Bone and Joint Surgery, Vol. 56B p3-16, 1974
- 3) 梨本一郎他:素潜り後にみられた血行性気泡。日本衛生学雑誌31巻1号251頁, 1976